ISSN 0918-9904

# 玉城丘陵の中世火葬坑群

研究紀要　第15-4号

2006（平成18）年３月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

三重県埋蔵文化財センターでは、三重県教育委員会の出先機関として平成元年度に設置されて以来、毎年度の事業として開発工事等に伴う緊急発掘調査を実施しております。センター発足後は、発掘調査そのものだけでなく、調査資料の整理・活用を体系的に実施することで、県民のみなさまをはじめとした全国の方々に広く「知」の情報を発信しております。

調査資料の整理・活用に関する作業は、発掘調査のような派手さは無く、見た目には非常に地道な作業でありますが、この作業を経ないと発掘調査そのものの意味が半減してしまいます。どのような調査を実施し、その遺跡がどういった性格付けができるのかを発信することは、いわば発掘調査遺跡の「巣立ち」ということもできます。

さて、このような整理・活用に関する作業は、センター発足前後の時期や、それ以前に調査がなされた遺跡については、不充分な資料が提示されたままになっているものがいくつかあります。これらの資料整理を体系的に進めることは、三重県の文化財保護を推進していくための大きな糧となるものと考えます。ここで報告する岡村中近世墓群は、このような経緯から整理作業を進めたものであります。

今後はこのような「埋もれた文化財」を整理し、さらなる情報を発信していくこととしていますので、みなさまのご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

平成18年３月24日
三重県埋蔵文化財センター
所長　　吉水康夫

# 例　　言

1　本書は、三重県度会郡玉城町岡村字城廻場（じょんば）に所在する岡村中近世墓群・城廻場遺跡・城廻場古墳群の発掘調査成果を報告するものである。
2　当調査は、平成２年度県道田丸停車場斎明線道路改良工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
3　発掘調査にかかる費用は、執行委任を受けて県土木部が負担した。
4　調査は、下記の体制で行った。
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第１課　第２係長　田中喜久雄
5　調査にあたっては、玉城町在住のみなさま、玉城町教育委員会および県関係機関の協力を得た。
6　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
7　本書作成に伴う遺物整理は支援研究グループが実施した。本書の執筆・編集は、調査担当である田中の記録をもとに、伊藤裕偉が行った。

# 凡　　例

＜地図類＞
1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、玉城町都市計画図（1986年）である。
2　玉城町都市計画図は、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものである。
3　遺構平面図は航空測量で作成されているが、任意座標である。挿図の方位は全て真北で表現した。なお、磁針方位は西偏６°30′（平成10年）である。
＜遺構類＞
4　本書での遺構は、発掘調査後時の遺構番号を変更し、全体を通番とした。その異同は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記については、調査時の遺構名で基本的に実施している。
5　遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。
6　遺構等の断面図は、いずれも断面・立面図となっている。
7　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。
ＳＤ‥‥溝、ＳＫ‥‥土坑、ＳＸ‥‥墓壙
＜遺物類＞
8　当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。
＜写真図版＞
9　挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
10　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

# 本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る契機と経過 ・・・

## Ⅰ　調査に至る契機と経過

今回の発掘調査は、県道田丸停車場斎明線の道路改良事業に伴うものである。工事の事業主体は三重県で、県土木部の管轄である。当地の事業紹介をもとに当センターが実施した分布調査および範囲確認調査により、事業地内約500㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成２年10月１日から平成３年１月13日までの間に実施した。

## Ⅱ　位置と歴史的環境

発掘調査地は、多気郡山間部を水源地とする外城田川北部に形成された、「玉城丘陵」と通称される丘陵部の東端部付近にあたる。玉城丘陵では古墳が、外城田川流域はとくに中世の遺跡が数多く確認されている地域である。

玉城丘陵では、とくに古墳時代中期初頭から後葉にかけての時期に、全長約75ｍの造出付円墳である大塚１号墳をはじめとする大形円墳の形成が顕著である。造出付大形円墳の群集地としては、伊勢でも屈指の地域といえる。後期に至ると、大形墳の形成こそ衰退するものの、数多くの群集墳が形成されている。その多くは墳丘の形態から木棺直葬を主体とするものと考えられる。今回の発掘調査地は、玉城丘陵に形成された古墳群の一角である城廻場古墳群の縁辺部にあたる。

飛鳥から奈良時代頃になると、玉城丘陵北端部で土器生産に関わる遺構（土器焼成坑）が数多く確認されており、土師器生産の一大拠点地域となっている。玉城丘陵北端部は『和名類従抄』に記載のある多気郡有貳（有尓）郷で、中世には神宮の役職である「有尓御器長」の活動が知れる地域である。中世の郡郷境は不明確で、有尓郷の範囲は一部度会郡に及んでいる節もある。なお、外城田川流域の奈良・平安時代の状況はよく分からない。

鎌倉・室町期から戦国期に至る中世では、外城田川流域に数多くの集落が形成されている。これは、神宮による神三郡（飯野・多気・度会郡）の直接支配が衰退するに伴い、やや下級の神官である権祢宜層の私領拡大に便乗するかたちで個別の御厨が増加したことが一因と考えられる。外城田川流域は、内宮祢宜である荒木田氏が深く関与した地である。ここには神宮領御厨・御薗が集中的に存在しており、在所としては現在の大字集落へと継続すると考えられる。当地の中世を考える上で、神宮との関係は極めて重要である。岡村中近世墓群が所在する岡村も、中世の段階には村落として成立していたものと推察される。

南北朝期に至ると、玉城丘陵の東端に田丸城が築かれる。田丸城は同期における南朝方の拠点であり、激しい攻防戦の展開したことが知られている。その後の田丸城は、北畠氏による神三郡支配の拠点となり、北畠氏当主自身が頻繁に利用している。

織豊期に北畠氏が織田氏によって摂取・併呑されると、田丸城は織田氏支配下の拠点となる。神三郡に対する田丸城が果たした機能は、織豊後期に一時的に岩出城（玉城町岩出）に移動するものの、江戸期には再度田丸城が再興され、紀州徳川藩領の政務拠点として機能し続けていた。

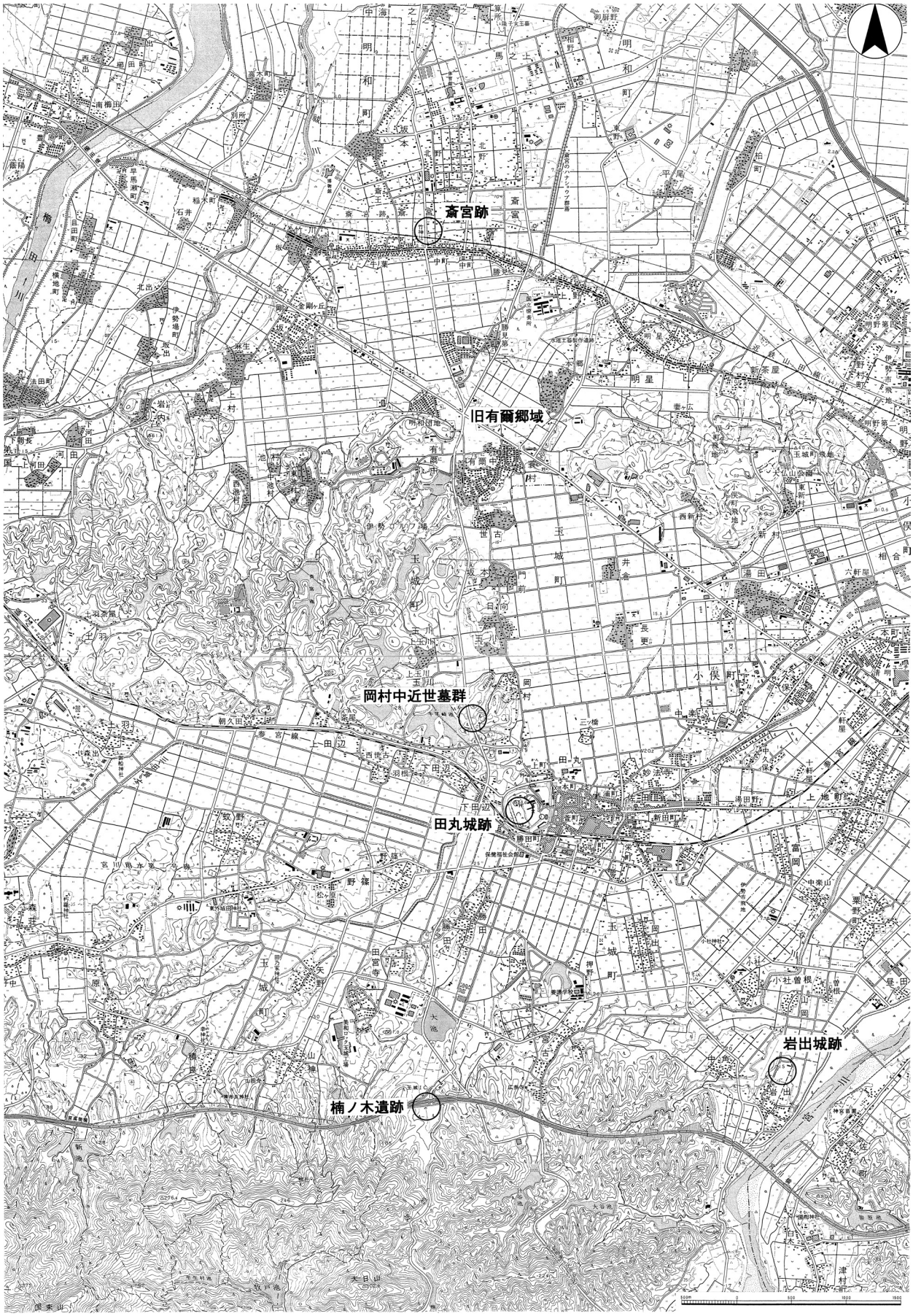
玉城丘陵南麓を含む外城田川流域における中世の状況は、以上のように豊富な事例を確認することができる。岡本中近世墓群は玉城丘陵北麓部にあたり、厳密には区分して考える必要もあるが、外城田川流域の遺跡動向とは密接に関係していると見るべきであろう。

＜参考文献＞

・京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成和名類従抄』（臨川書店　1966年）

・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊(1991年)

・伊藤裕偉「櫛田川流域」（『日本の古代遺跡52三重』保育社　1996年）




第１図　遺跡位置図（1：50,000）　国土地理院 1：25,000「松阪」「明野」「国束山」「伊勢」を使用

第２図　遺跡周辺地形図（1：5,000）（「玉城町都市計画図」1986年より）

## Ⅲ　検出した遺構

検出した遺構には、岡村中近世墓群に関するものが圧倒的に多い。また、城廻場遺跡・城廻場古墳群に関係するものも少量認められる。

### 1　岡村中近世墓群

中近世墓に関係する火葬坑は、合計99基検出された。火葬坑の状況は、第１～２表に一覧で示した。

**群構成**　調査地は、丘陵東斜面に位置する。全体の地形は、丘陵尾根部分と、その東側に形成されたテラス状の段によって構成されている。テラスは自然地形というよりは、火葬坑群の形成に伴って人為的に造作されたと考えられる。

火葬坑は、丘陵稜線部（Ａ群）と、その東斜面に形成された幅３ｍ程度のテラス状部（Ｂ群）に大きく分けることができる。丘陵稜線部に形成された火葬坑は19基、テラス状部の火葬坑は80基で、テラス部の方が圧倒的に多い。群集の状況は、Ｂ群では多くの火葬坑が重複して検出されているのに対し、Ａ群では散在しており、重複するものは少ない。また、丘陵稜線部の火葬坑には、鏡が副葬されるもの（ＳＸ50）や、突起を持つ棺（ＳＸ57）など、やや立派な墓が目立つようにもみえる。

**坑の形態**　火葬坑は長方形を呈するものが多く、一部円形・楕円形のものが見られる。長方形のものでは、長軸が70～120㎝、短軸が50～80㎝のものが圧倒的に多い。特殊なものとして、ＳＸ57のように、突起を有するものもある（第10図）。

ほとんどの遺構は壁面が熱変している。つまり、火葬坑と考えてよい。埋土内からは木炭のほかに釘が出土しているものがあるので、木棺を火葬したものと考えられる。ＳＸ50に副葬されていた鏡は、熱で変形している。これらのことから、副葬品を有した状態の棺を埋置し、それに火を掛けて火葬していることがわかる。すなわち、当地は荼毘の場であることを明瞭に物語っているといえる。また、鏡をはじめとした副葬品や火葬骨は、その一部が収骨されている可能性はあるものの、一定量がそのまま残されていると判断される。したがって、当地は荼毘の場であるとともに、埋葬地としての機能も果たしていたと考えられる。

**火葬坑内の施設**　火葬坑内部に礫を伴うものが多い。礫には、土坑下面に並べられた状態で出土していることから、棺台と考えられるもの（ＳＸ70、第11図）がある。この他には、棺の上にあたる位置から大礫が確認されているもの（ＳＸ43・84・87、第11図）や、遺構の底から浮いた状態で礫群が見られるもの（ＳＸ86）などがある。これらは、棺の上を礫で押さえていたものと考えられるが、大石を伴うものについては、棺を封じ込めるといった精神的な意味合いが含まれている可能性も想定できる。

**出土遺物**　出土遺物は全体に少ない。鏡が副葬されたＳＸ50や、小刀や鎌が副葬されたＳＸ59・60・83、土師器皿類を伴うものなどもあるが、その数は少なく、火葬坑の多くは副葬品を伴わないものである。そのため、時期不明の遺構が大部分である。

**墓壙群の時期**　遺構内もしくは遺構外から出土している土器は、15世紀前半頃から16世紀初頭頃にかけてのものである。明らかに近世の遺構といえるのは、銭貨23枚を副葬したＳＸ37のみである。したがって岡村中近世墓群は、その多くが中世後期に比定できると考えられる。

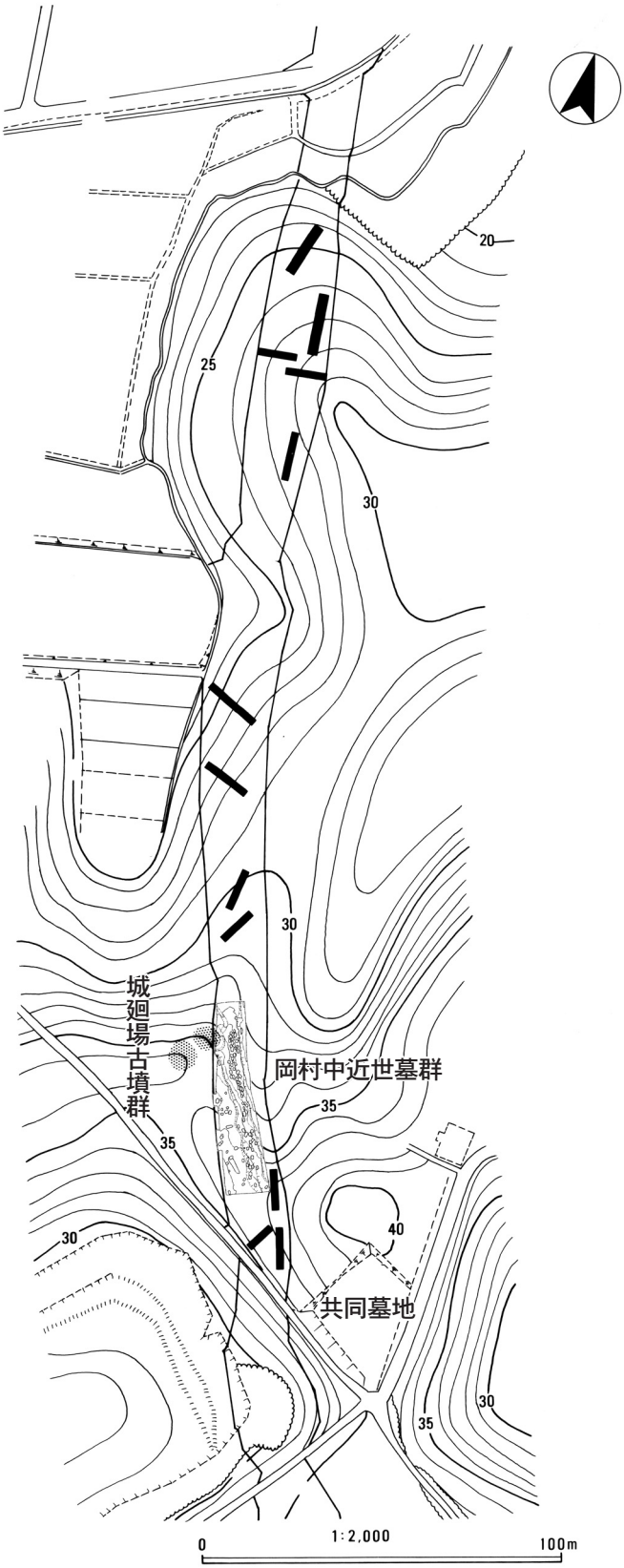
**その他**　火葬坑以外の遺構としては、丘陵稜線部にある溝ＳＤ100がある。長さ約６ｍである。遺構の性格はよく分からない。

### 2　城廻場遺跡

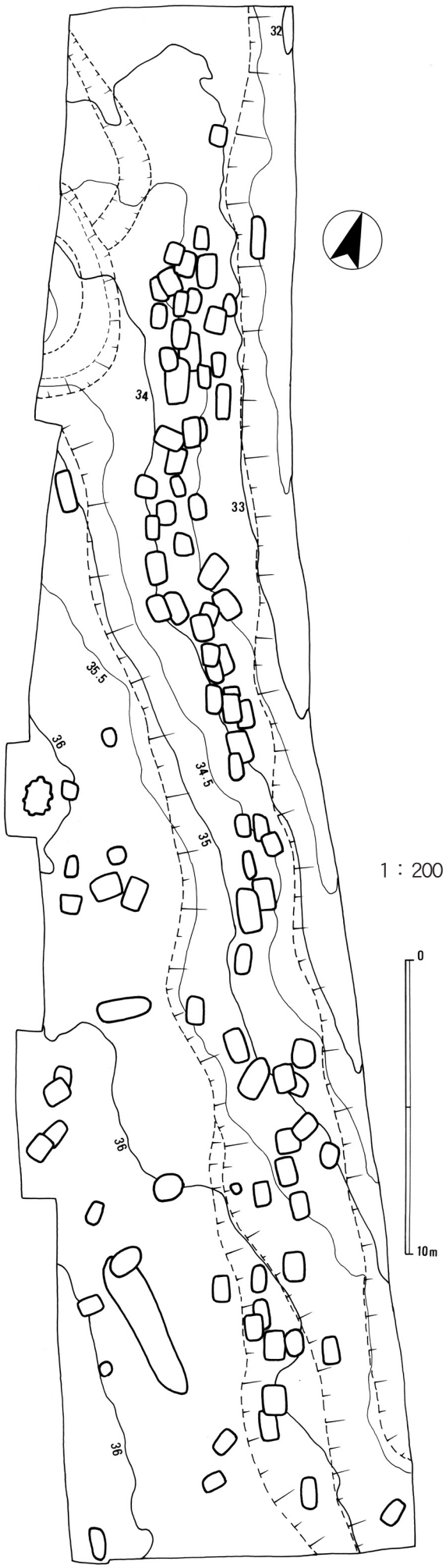
城廻場遺跡に相当する遺構は、調査区北部で検出した溝ＳＤ101のみである。この溝はＬ字形に屈曲し、幅約1.5ｍ、深さ20㎝程度である。埋土内からは、弥生時代後期前半に相当する土器が出土している。遺構の形状から、方形周溝墓の一角である可能性が高い。

### 3　城廻場古墳群

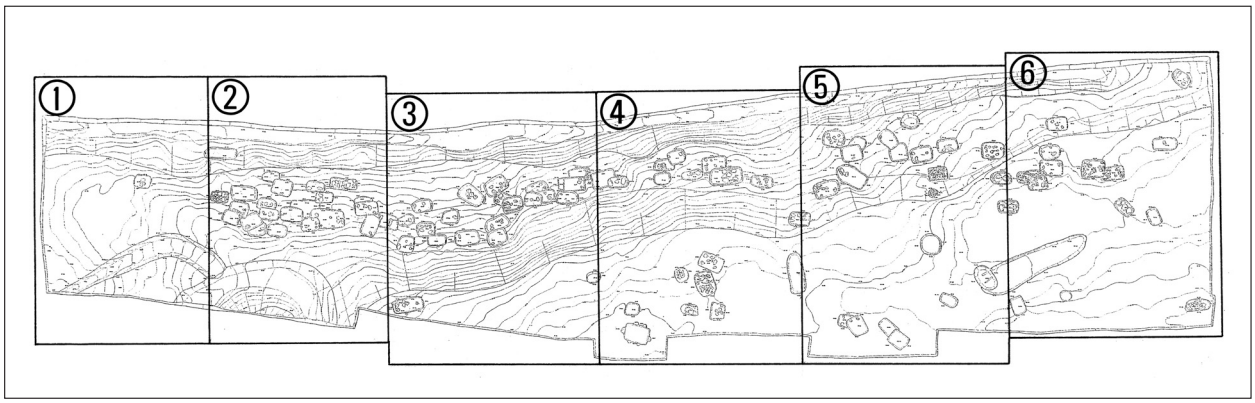
調査区北部で、２号墳に伴う周溝の一部を検出した。周溝幅は約２ｍである。埋土内からの遺物は無く、所属時期は不明である。

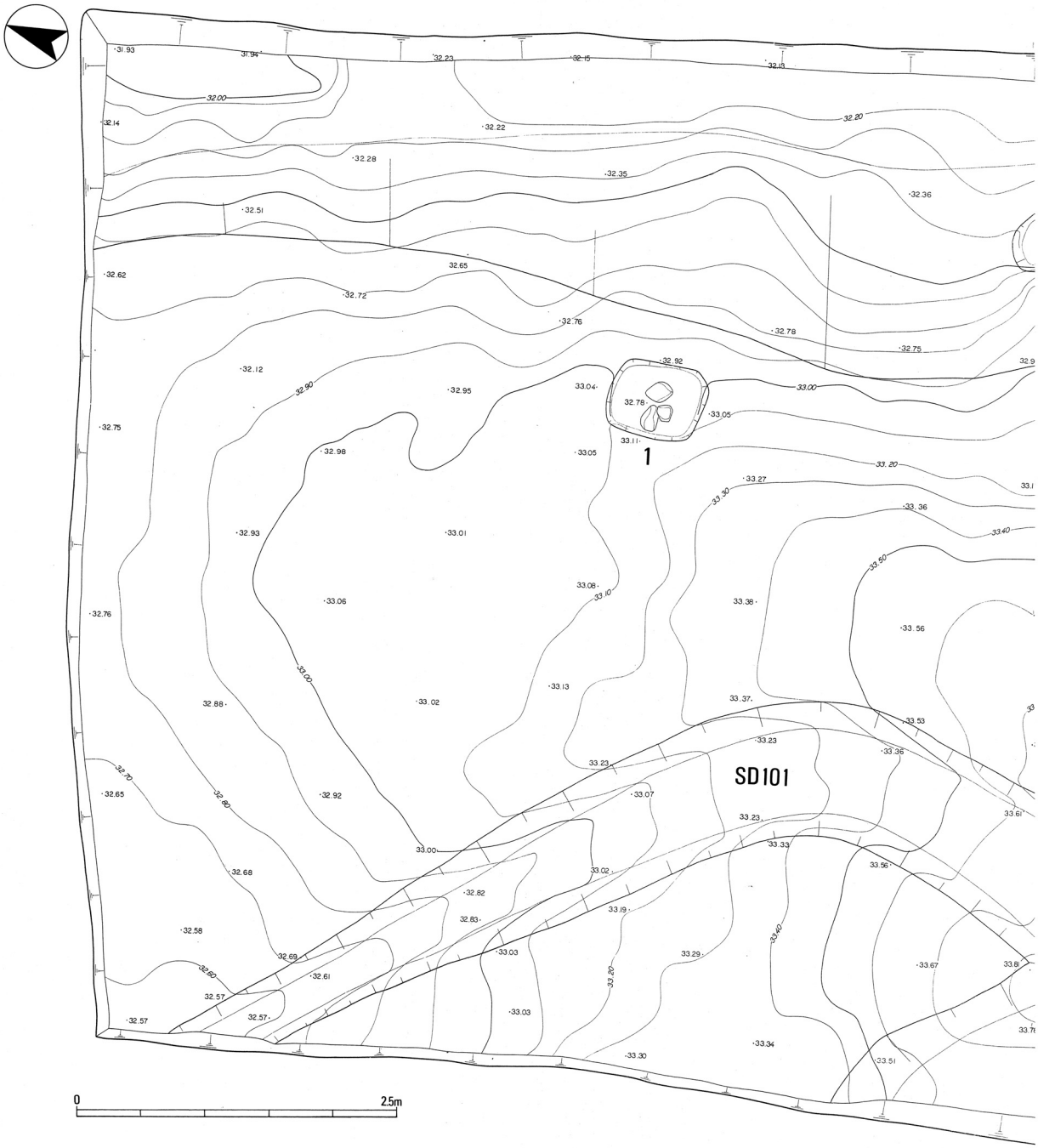



※黒ベタは範囲確認調査坑

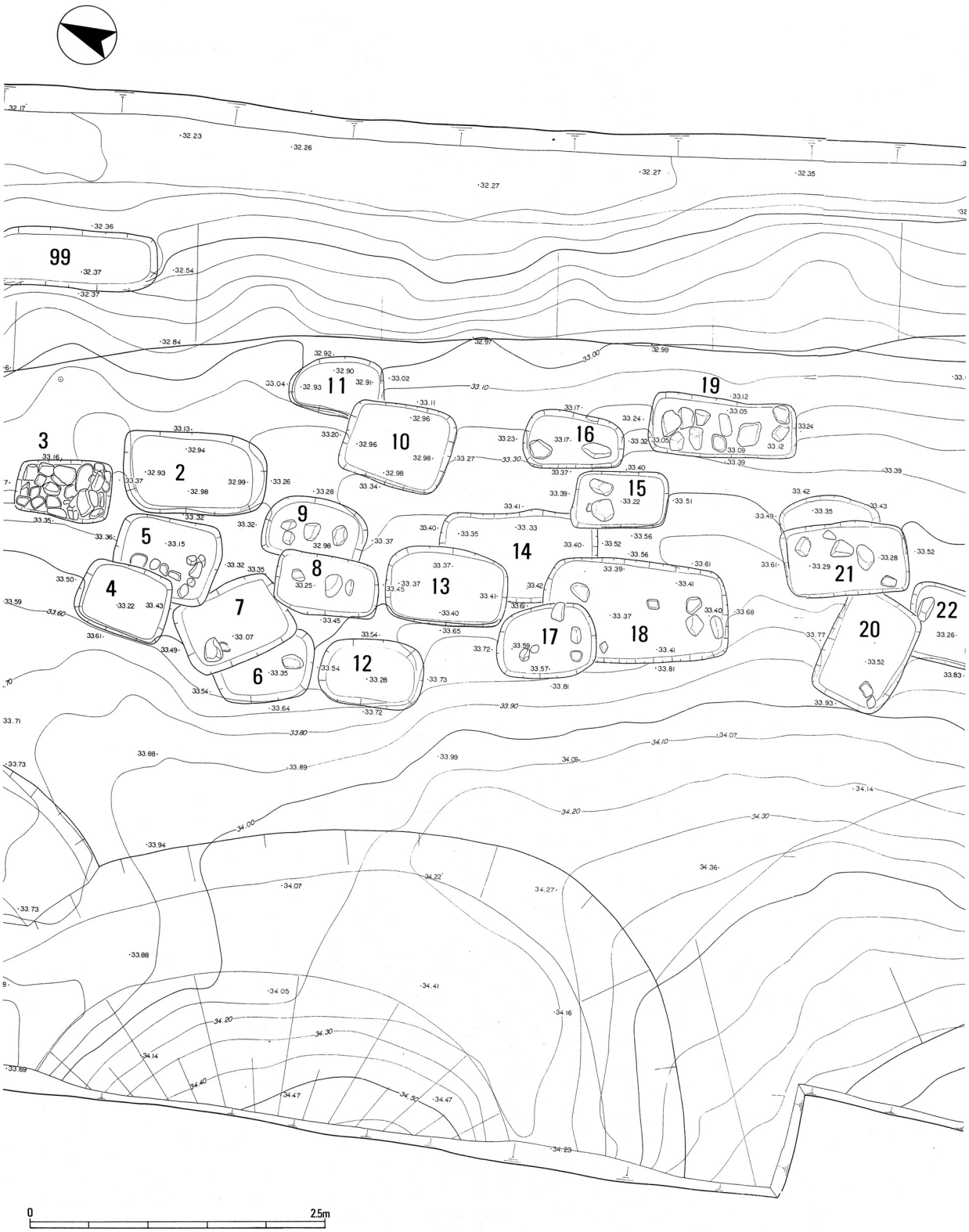



第３図　事業地内調査区位置図および遺構全体図

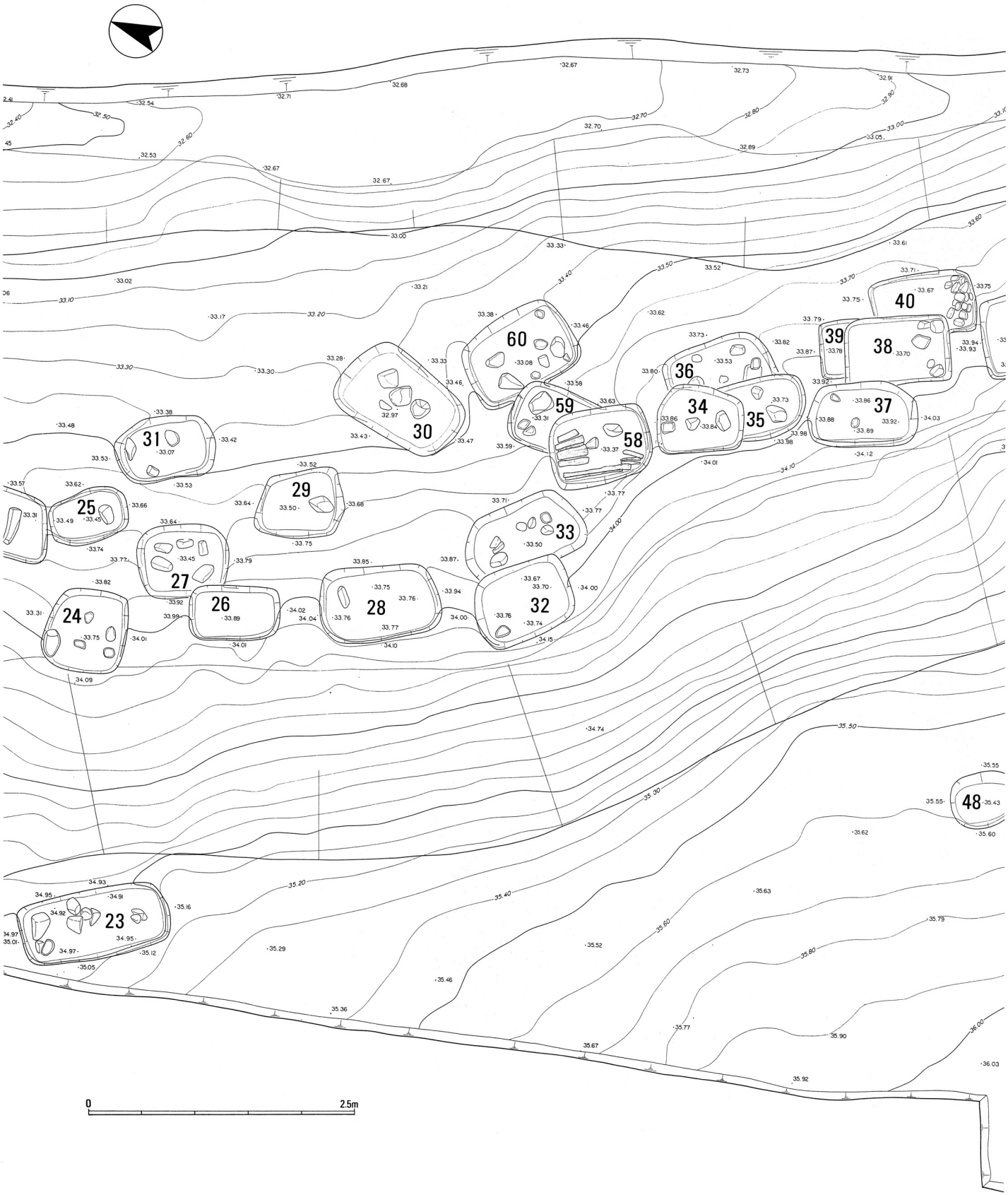


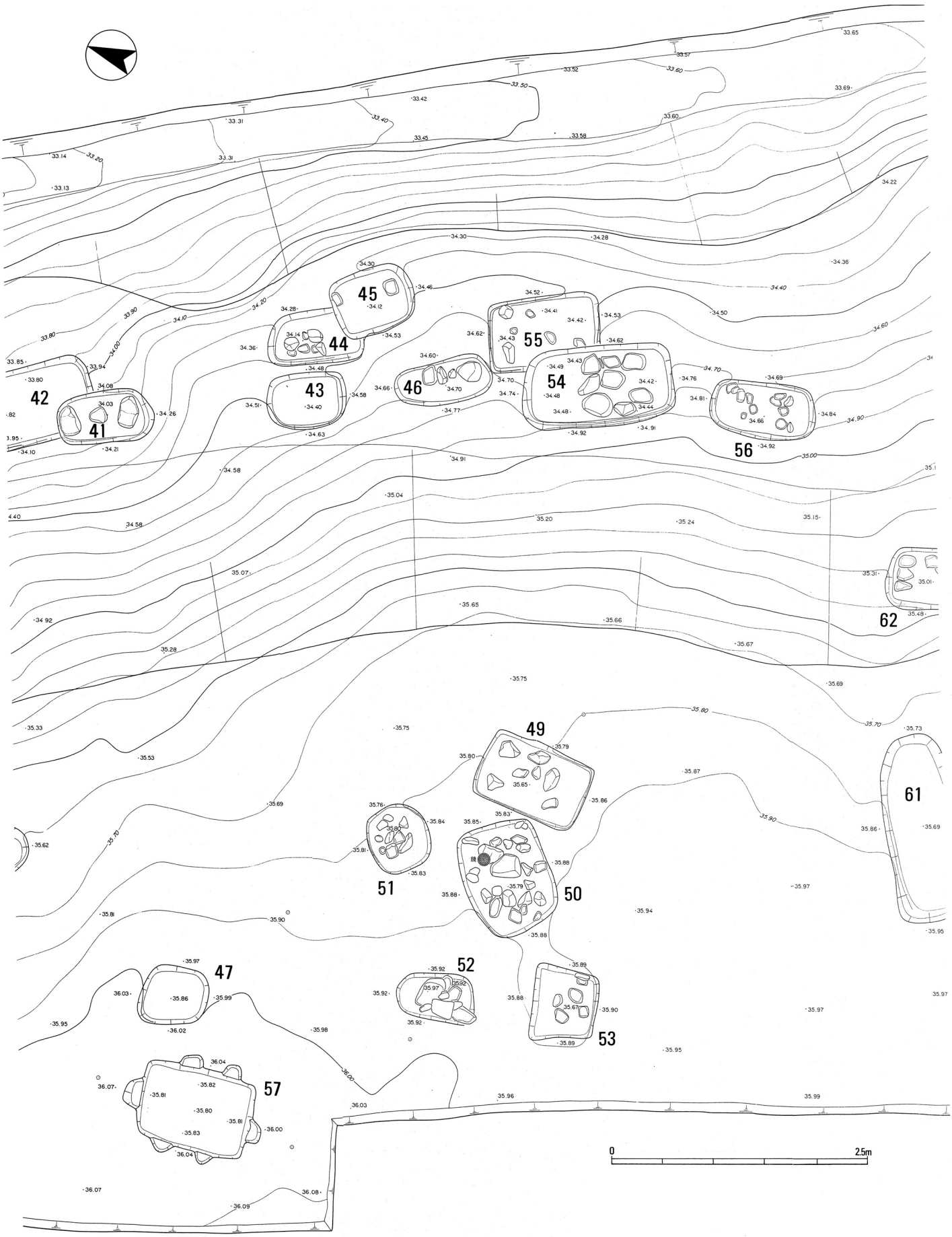

第４図　調査区平面図①（1：50）　　遺構略記号のうち、「SX」は省略した。



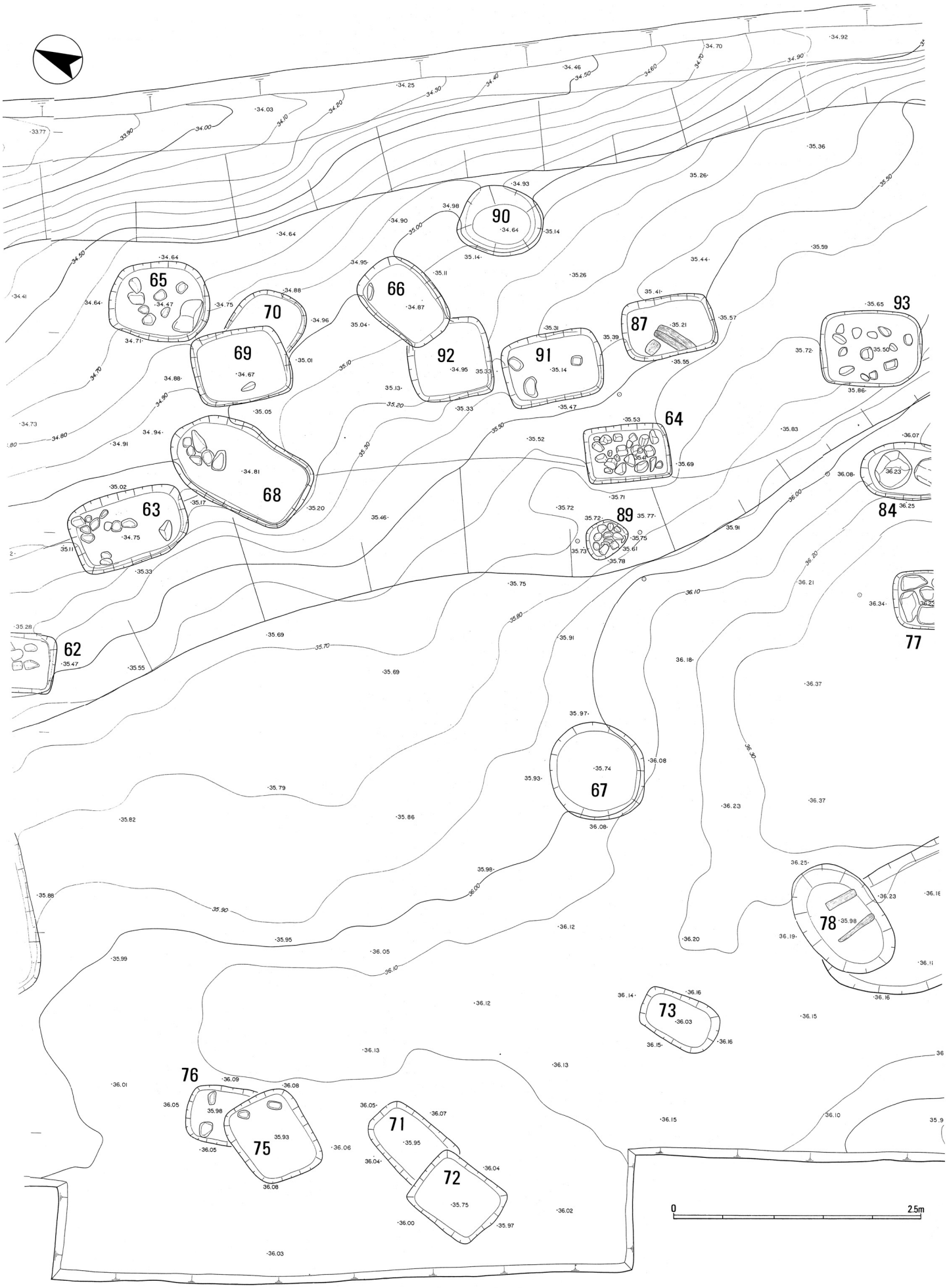

第５図　調査区平面図②（1：50）



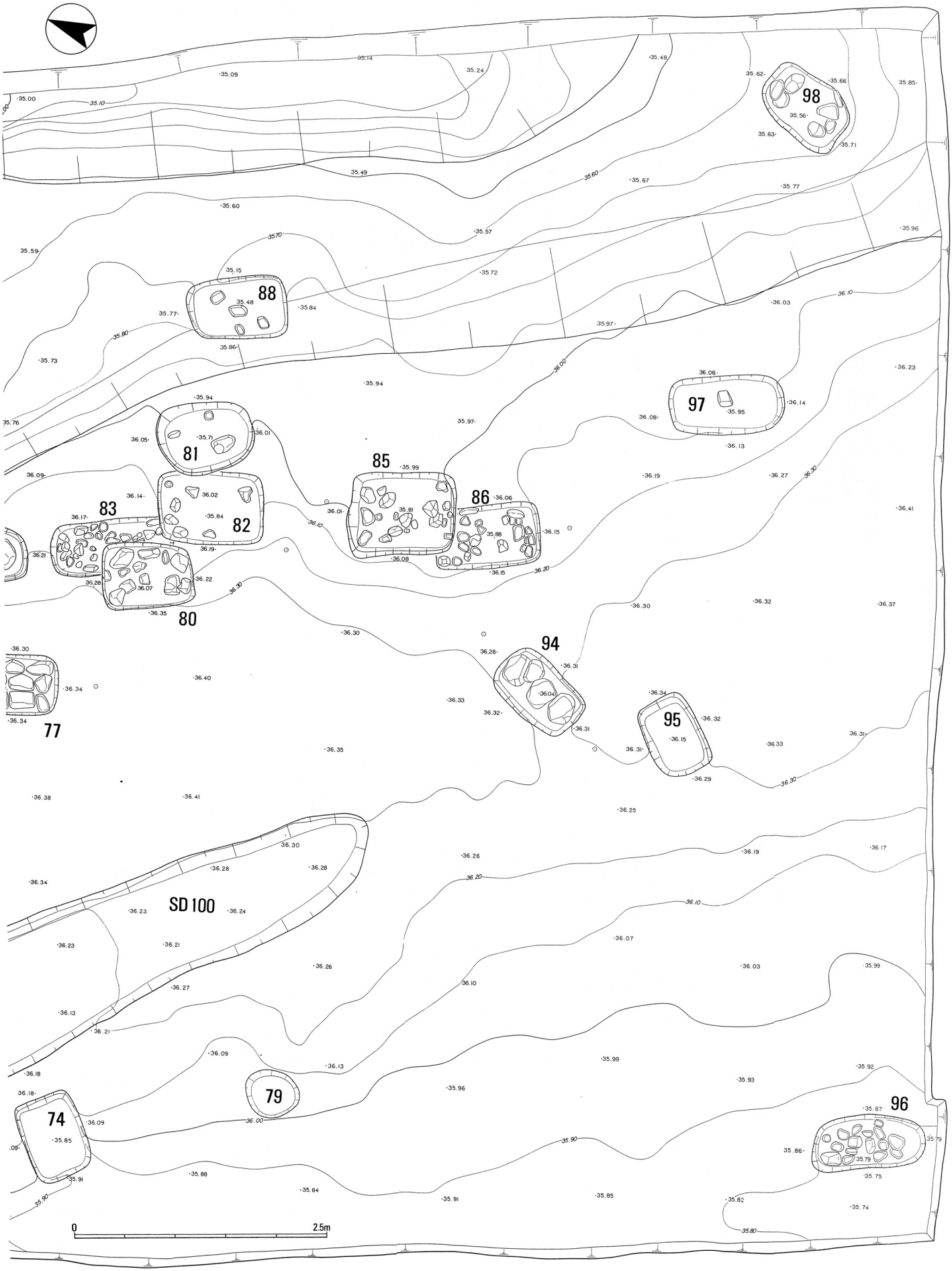

第６図　調査区平面図③（1：50）



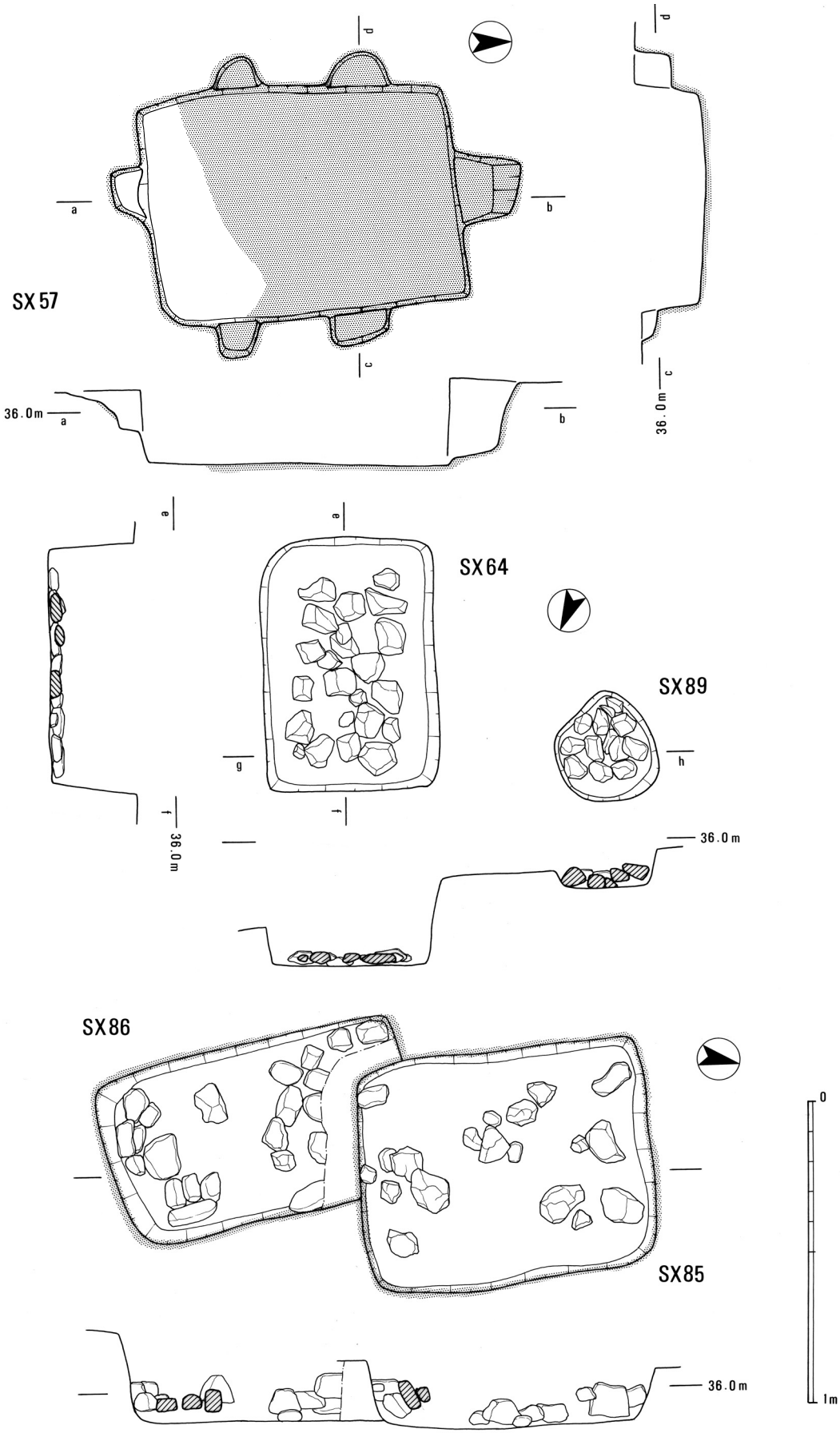

第７図　調査区平面図④（1：50）



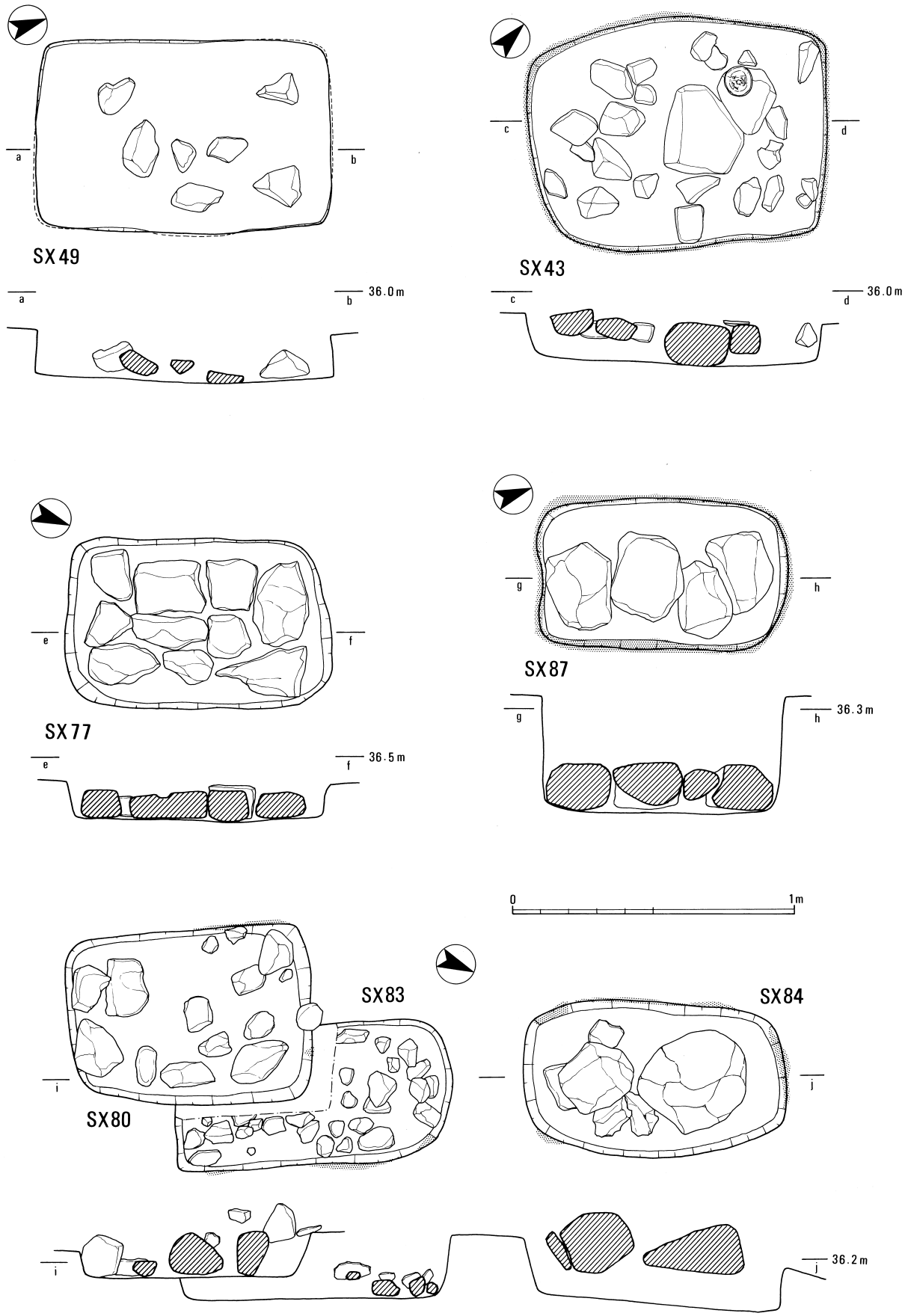

第８図　調査区平面図⑤（1：50）




第９図　調査区平面図⑥（1：50）




第10図　個別遺構①（1：20）




第11図　個別遺構②（1：20）

## 第１表　岡村中近世墓群ほか検出遺構一覧(1)

| 遺構番号 | 調査時遺構番号 | 位置 | 遺構の状況 | | | 土壙墓内遺物 | | | | 時期 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 形状 | 規模(長辺×短辺×深さ)cm | 特徴 | 有機物 | 副葬品類 | 棺部材 | その他 | 年代 | 土器 | |
| ＳＸ１ | 遺構１ | テラス | 長方 | ７４×５９×３０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２ | 遺構２ | テラス | 長方 | １２２×７０×３５ | | | | | 土師器混入 | 15世紀後葉以降 | | |
| ＳＸ３ | 遺構２’ | テラス | 長方 | ７９×５３×３５ | 石敷 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ４ | 遺構３ | テラス | 長方 | ７６×６１×４０ | | | | | | | | |
| ＳＸ５ | 遺構３’ | テラス | 長方 | ８８×６８×２０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | ＳＸ４・７より古 |
| ＳＸ６ | 遺構４ | テラス | 長方 | ８４×５６×３０ | 石 | 骨・炭 | | | 土師器混入 | 13世紀中葉以降 | | |
| ＳＸ７ | 遺構４’ | テラス | 長方 | ９１×６６×４０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | ＳＸ６・８・９より古 |
| ＳＸ８ | 遺構５ | テラス | 長方 | ８６×５１×２０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ９ | 遺構５’ | テラス | 長方 | ８８×５３×４０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | ＳＸ８より古 |
| ＳＸ１０ | 遺構６ | テラス | 長方 | ９１×７０×４０ | | 骨 | | | 土師器混入 | 15世紀中葉以降 | | |
| ＳＸ１１ | 遺構７ | テラス | 長方 | ８１×５１×２５ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ１２ | 遺構８ | テラス | 長方 | ８６×５６×４５ | | 骨 | | | 土師器混入 | 15世紀中葉以降 | | |
| ＳＸ１３ | 遺構９ | テラス | 長方 | １０２×６５×２０ | | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ１４ | 遺構１０ | テラス | 長方 | １３４×７７×２０ | | 骨 | | | 土師器混入 | 15世紀中葉以降 | | |
| ＳＸ１５ | 遺構１１ | テラス | 長方 | ７８×４８×３５ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ１６ | 遺構１２ | テラス | 長方 | ８６×４８×２０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ１７ | 遺構１３ | テラス | 長方 | ８４×６１×２０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ１８ | 遺構１４ | テラス | 長方 | １５６×８６×４０ | 石 | 骨 | 土師器小皿・皿 | 釘 | | 15世紀中葉 | | |
| ＳＸ１９ | 遺構１５ | テラス | 長方 | １２４×５１×３０ | 石 | 骨 | 土師器小皿 | | | 15世紀中葉 | | |
| ＳＸ２０ | 遺構１６ | テラス | 長方 | ９８×７１×４０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ２１ | 遺構１７ | テラス | 長方 | １０４×６２×３０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２２ | 遺構１８ | テラス | 長方 | ９２×６４×５５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２３ | 遺構１９ | 稜線 | 長方 | １４１×６６×２０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２４ | 遺構２０ | テラス | 方 | ７９×７６×３５ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ２５ | 遺構２１ | テラス | 長方 | ７４×４９×３０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２６ | 遺構２２ | テラス | 長方 | ８６×５１×１５ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２７ | 遺構２２’ | テラス | 長方 | ８５×６８×５０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２８ | 遺構２３ | テラス | 長方 | １１２×６９×３５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ２９ | 遺構２４ | テラス | 長方 | ８１×６４×２５ | 石 | | 土師器小皿・皿 | | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ | |
| ＳＸ３０ | 遺構２４’ | テラス | 長方 | １１８×７５×５０ | 覆石 | 骨 | 土師器小皿 | | | | | |
| ＳＸ３１ | 遺構２５ | テラス | 長方 | ９４×５９×４５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ３２ | 遺構２６ | テラス | 長方 | ９４×６９×４０ | 石 | 骨・炭 | 土師器皿 | | | 15世紀後葉 | Ⅳａ | |
| ＳＸ３３ | 遺構２７ | テラス | 長方 | １１４×６５×４０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ３４ | 遺構２８ | テラス | 長方 | ８１×６２×１５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ３５ | 遺構２９ | テラス | 長方 | ？×５８×２５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ３６ | 遺構３０ | テラス | 長方 | １０１×？×２５ | 石 | | 土師器皿 | | | 15世紀中葉 | | |
| ＳＸ３７ | 遺構３１ | テラス | 長方 | １０２×６１×２５ | 石 | 骨 | 銭貨２３枚 | | | 近世 | | |
| ＳＸ３８ | 遺構３２ | テラス | 長方 | １００×６３×３０ | 石 | | | | | | | |
| ＳＸ３９ | 遺構３３ | テラス | 長方？ | ？×５５×１５ | | | | | | | | |
| ＳＸ４０ | 遺構３４ | テラス | 長方 | ９６×５９×３０ | 石 | 骨 | 土師器皿 | | | | | |
| ＳＸ４１ | 遺構３５ | テラス | 長方 | ９４×５１×１５ | 覆石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ４２ | 遺構３６ | テラス | 長方 | １１１×７６×３０ | | 炭 | | | | | | |
| ＳＸ４３ | 遺構３７ | テラス | 長方 | ７８×５６×２５ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ４４ | 遺構３７’ | テラス | 長方 | ９６×５４×３５ | 石 | | | | | | | |
| ＳＸ４５ | 遺構３８ | テラス | 長方 | ８２×６４×４０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ４６ | 遺構３９ | テラス | 長方 | ９６×４４×１０ | 覆石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ４７ | 遺構４０ | 稜線 | 長方 | ６６×５８×１５ | | 骨 | 土師器皿 | | | 15世紀前葉？ | Ⅲｂ | |
| ＳＸ４８ | 遺構４１ | 稜線 | 楕円 | ６５×５３×１５ | | | | | | | | |
| ＳＸ４９ | 遺構４２ | 稜線 | 長方 | １０８×７２×１５ | 石・被熱 | 骨 | 土師器小皿 | | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ～Ⅳａ | |
| ＳＸ５０ | 遺構４３ | 稜線 | 長方 | １１１×８４×１０ | 石・被熱 | 骨 | 鏡 | | | 15世紀中葉？ | | |
| ＳＸ５１ | 遺構４４ | 稜線 | 方 | ６４×６０×１０ | 石・被熱 | 骨 | | | | | | |

## 第２表　岡村中近世墓群ほか検出遺構一覧(2)

| 遺構番号 | 調査時遺構番号 | 位置 | 遺構の状況 | | | 土壙墓内遺物 | | | | 時期 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 形状 | 規模(長辺×短辺×深さ)cm | 特徴 | 有機物 | 副葬品類 | 棺部材 | その他 | 年代 | 土器 | |
| ＳＸ５２ | 遺構４５ | 稜線 | 長方 | ７４×４８×１５ | 覆石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ５３ | 遺構４６ | 稜線 | 長方 | ７１×６４×１５ | 石 | | | | | | | |
| ＳＸ５４ | 遺構４７ | テラス | 長方 | １４９×７８×４０ | 石 | 骨・炭 | | | | | | |
| ＳＸ５５ | 遺構４８ | テラス | 長方 | １１０×７１×３０ | 石 | 骨・炭 | | | | | | |
| ＳＸ５６ | 遺構４９ | テラス | 長方 | １０２×５５×２５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ５７ | 遺構５０ | 稜線 | 突起付長方 | １１１×８４×５５ | 被熱 | 骨・炭 | | 釘 | 土師器混入 | | | 全面被熱 |
| ＳＸ５８ | 遺構５１ | テラス | 長方 | ９５×７２×４０ | 石・炭 | 骨 | 土師器小皿 | | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ～Ⅳａ | |
| ＳＸ５９ | 遺構５２ | テラス | 長方 | ？×６４×３０ | 石 | 骨 | 小刀 | | | | | |
| ＳＸ６０ | 遺構５３ | テラス | 長方 | １０７×７６×５０ | 石 | 骨 | 土師器小皿・皿・小刀 | | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ | |
| ＳＫ６１ | 遺構５４ | 稜線 | 長方 | １８５×７４×２５ | | | | | | | | |
| ＳＸ６２ | 遺構５５ | テラス | 長方 | ９４×６０×５０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ６３ | 遺構５６ | テラス | 長方 | １１６×７５×６０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ６４ | 遺構５７ | テラス | 長方 | ８５×５８×３０ | 石 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ６５ | 遺構５８ | テラス | 長方 | １０１×８１×２５ | 石 | 骨 | 土師器小皿・皿 | | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ | |
| ＳＸ６６ | 遺構５９ | テラス | 長方 | ９６×６６×２５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ６７ | 遺構６０ | 稜線 | 円 | １００×９６×３５ | | | | | | | | |
| ＳＸ６８ | 遺構６１ | テラス | 長方 | １４６×８１×４０ | 石 | 骨・炭 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ６９ | 遺構６２ | テラス | 長方 | ９４×７４×３５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ７０ | 遺構６３ | テラス | 長方？ | ？×７１×？ | | | | | | | | |
| ＳＸ７１ | 遺構６４ | 稜線 | 長方 | ８８×５８×１０ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ７２ | 遺構６５ | 稜線 | 長方 | ８５×６８×２５ | | 骨 | | 釘 | 土師器混入 | 15世紀中葉以降 | | |
| ＳＸ７３ | 遺構６６ | 稜線 | 長方 | ８２×４８×１５ | | | 土師器皿 | | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ | |
| ＳＸ７４ | 遺構６７ | 稜線 | 長方 | ８２×６０×６５ | | 骨 | | | 土師器混入 | 15世紀中葉以降 | | |
| ＳＸ７５ | 遺構６８ | 稜線 | 長方 | ９１×７５×１５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ７６ | 遺構６９ | 稜線 | 長方？ | ？×６０×１０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ７７ | 遺構７０ | テラス | 長方 | ９４×６３×１５ | 石敷 | 骨 | 土師器小皿・皿 | | | | | |
| ＳＸ７８ | 遺構７１ | 稜線 | 楕円 | １２４×８１×２５ | 炭 | 骨 | 土師器皿 | | 土師器混入 | 15世紀中葉 | Ⅲｂ | |
| ＳＸ７９ | 遺構７２ | 稜線 | 円 | ５０×４８×？ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ８０ | 遺構７４ | テラス | 長方 | ８９×６４×２０ | 石敷・被熱 | 骨 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ８１ | 遺構７５ | テラス | 長方 | ９４×６９×３０ | 石・被熱 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ８２ | 遺構７６ | テラス | 長方 | １０４×７１×３５ | 石・被熱 | 骨 | 土師器小皿・皿 | 釘 | | 15世紀中葉 | Ⅲｂ | |
| ＳＸ８３ | 遺構７７ | テラス | 長方 | １１８×５２×２０ | 石・被熱 | 骨 | 鎌 | | | | | |
| ＳＸ８４ | 遺構７８ | テラス | 長方 | ９５×５８×２５ | 覆石・被熱 | | | | | | | |
| ＳＸ８５ | 遺構７９ | テラス | 長方 | １０４×８０×２０ | 石敷・被熱 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ８６ | 遺構８０ | テラス | 長方 | １０４×６３×３０ | 石敷・被熱 | | | | | | | |
| ＳＸ８７ | 遺構８１ | テラス | 長方 | ９４×６１×３０ | 炭 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ８８ | 遺構８２ | テラス | 長方 | ９１×６１×４０ | 石 | 骨 | 白磁椀 | | | 15世紀後葉？ | | |
| ＳＸ８９ | 遺構８３ | テラス | 円 | ４１×３５×１２ | 石 | | | | | | | |
| ＳＸ９０ | 遺構８４ | テラス | 長方？ | ８３×７０×５０ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ９１ | 遺構８５ | テラス | 長方 | １０１×７０×３５ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ９２ | 遺構８５’ | テラス | 方 | ８４×８１×４０ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ９３ | 遺構８６ | テラス | 長方 | １０２×７６×３５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ９４ | 遺構８７ | 稜線 | 長方 | ９３×５８×４０ | 覆石・被熱 | 骨・灰 | | | 土師器混入 | | | |
| ＳＸ９５ | 遺構８８ | 稜線 | 長方 | ８１×５７×２０ | | | | | | | | |
| ＳＸ９６ | 遺構８９ | 稜線 | 隅丸長方 | １１４×５３×１０ | 石 | | | | | | | |
| ＳＸ９７ | 遺構９０ | 稜線 | 隅丸長方 | １１４×５９×２０ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ９８ | 遺構９１ | テラス | 長方 | ９０×５９×１５ | 石 | 骨 | | | | | | |
| ＳＸ９９ | 遺構９２ | テラス | 長方 | １４６×５１×１５ | | 骨 | | | | | | |
| ＳＤ１００ | 遺構７３ | | | | | | | | | 15世紀後葉？ | | |
| ＳＤ１０１ | A12ＳＤ | | | | | | 弥生土器 | | | 弥生後期 | | |

# Ⅳ　出土した遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱に換算して約４箱である。内訳は、土器類が中心である。また、遺物ではないが、相当量の人骨も出土している。これらの遺物が出土した状態についても、第１～２表に示している。

## １　城廻場遺跡出土遺物

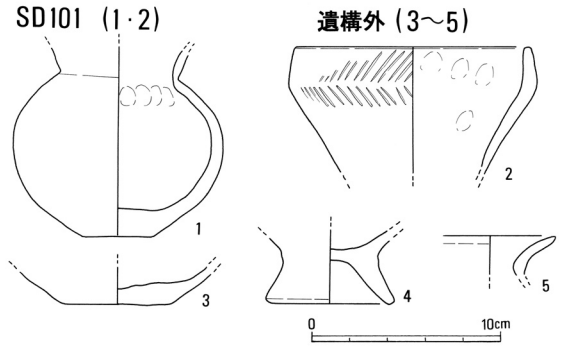
城廻場遺跡出土遺物には、弥生時代中期後半から奈良時代のものが認められる。

１・２は溝ＳＤ101から出土したもの。１は小形の壺、２は壺の底部である。これらは、弥生時代後期前半頃のものであろう。４は台付甕の脚台部で、これも弥生時代後期前半のものと考えられる。３は壺。袋状口縁を呈し、口縁部外面には刺突による綾杉文が施されている。弥生時代中期後葉か、後期前半頃のものであろう。５は土師器甕の口縁部片で、奈良時代頃のものである。

## ２　岡村中近世墓群出土遺物

**土器類**　土師器類は、いずれも南伊勢系のものである。土師器皿を伴う遺構では、ＳＸ32が南伊勢中世Ⅳａ期（15世紀後葉）にあたるが、それ以外はⅢｂ期（15世紀中葉）にあたる(1)。遺構外出土遺物のなかには、65～68のようにⅣａ期の新相に相当するものが含まれている。37は白磁の小椀。63は、Ⅲｂ期からⅣａ期頃に、櫛田川・宮川流域で稀に見られる土師器椀の口縁部である。

土器類は、基本的に火葬される前の段階で副葬されているものと考えられる。鍋類は被熱が激しく、全体が赤変している。皿類が比較的完形品で確認できるものが多いのに対し、鍋類は小片で確認されたものが多く、比較的確認しやすい口縁部ですら、完周するものは確認できなかった。このことから、鍋類は火葬の段階で棺上などの被熱し易い場所に置かれ、皿類は棺内の隅の方に入れられていたという可能性も想定できる。あるいは、鍋類は副葬品ではなく、葬送用具として用いられ破損したものが火葬坑内に入り込んだのかも知れない。




第12図　出土遺物(1)弥生・古代

**石製品**　遺構外であるが、五輪塔の空輪の先端部が出土している(64)。石材は砂岩である。なお、今回の調査区で出土した五輪塔は、この破片が唯一のものである。

**鉄製品**　ＳＸ59・60では小刀が出土している(25・28)。これらの小刀は小振りのもので、工具の部類に近い。ＳＸ83からは鎌が出土している(54)。また、ＳＸ57・84からは、棺の部材として用いられた釘が出土している。

**鏡**　74はＳＸ50から出土した和鏡。焼け歪んでいる。直径約9.5㎝の円形を呈する蓬莱鏡である。紐は花亀甲亀紐で、亀は左を向く。内側の圏線は中線の単圏で、圏線による内区・外区の区別は無い。縁の高さは約6.5㎜で、蒲鉾式低縁である。

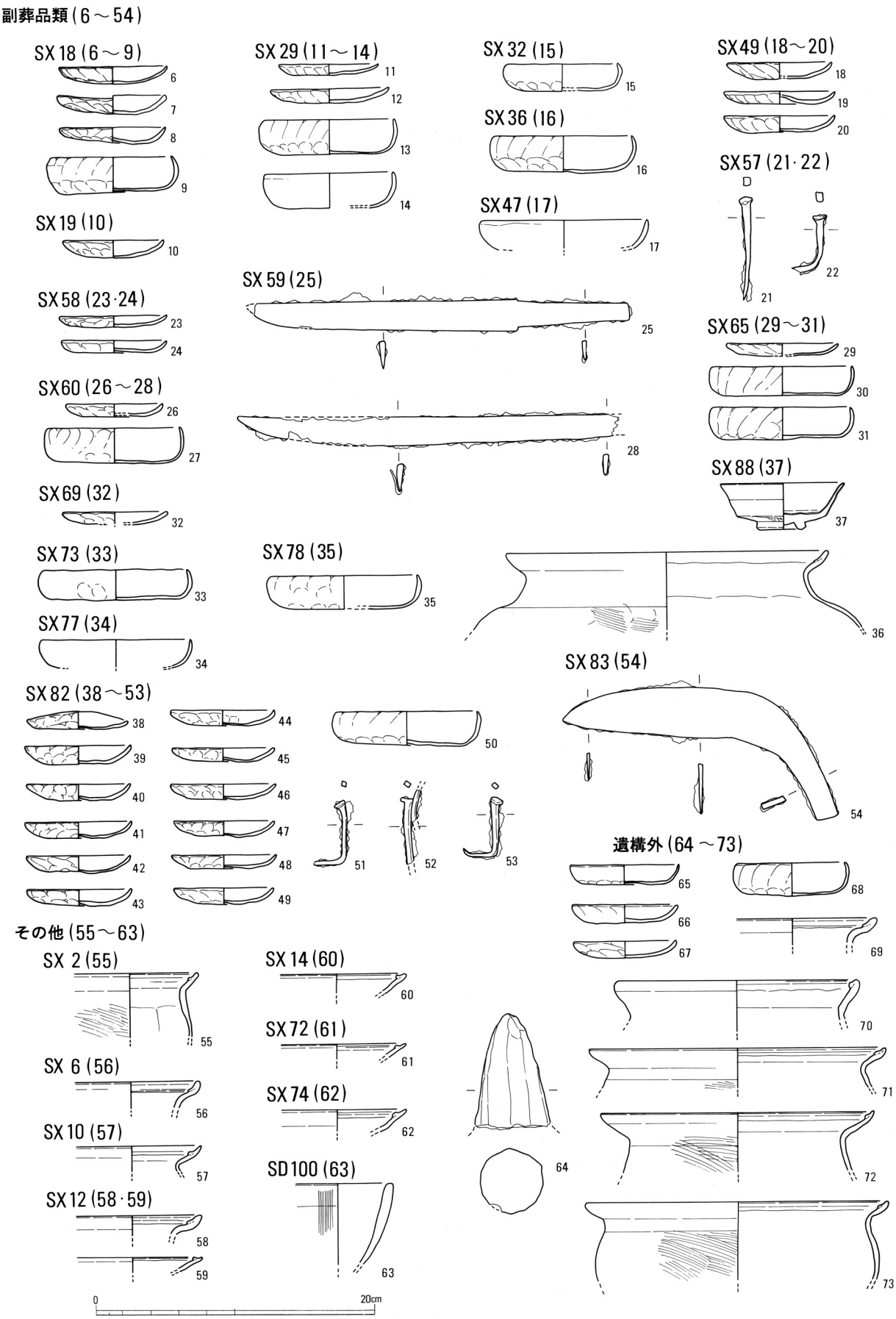
画郭左手には雌雄一対と見られる双鶴が描かれ、二羽ともに砂州上に降り立っている。右手には蓬莱山が波濤状の表現でなされる。下方には波濤文と流水文が描かれる。画郭左側からは外区沿いに緑竹が伸び、右側からは蓬莱山に根ざす松が伸びている。和鏡の年代は、概ね鎌倉時代後半頃と考えられる(2)。

**銭貨**　75～89は、ＳＸ37から出土した銭貨。いずれも寛永通寶である。

＜註＞

(1)土師器類の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』静岡大学　2005年）に拠る。

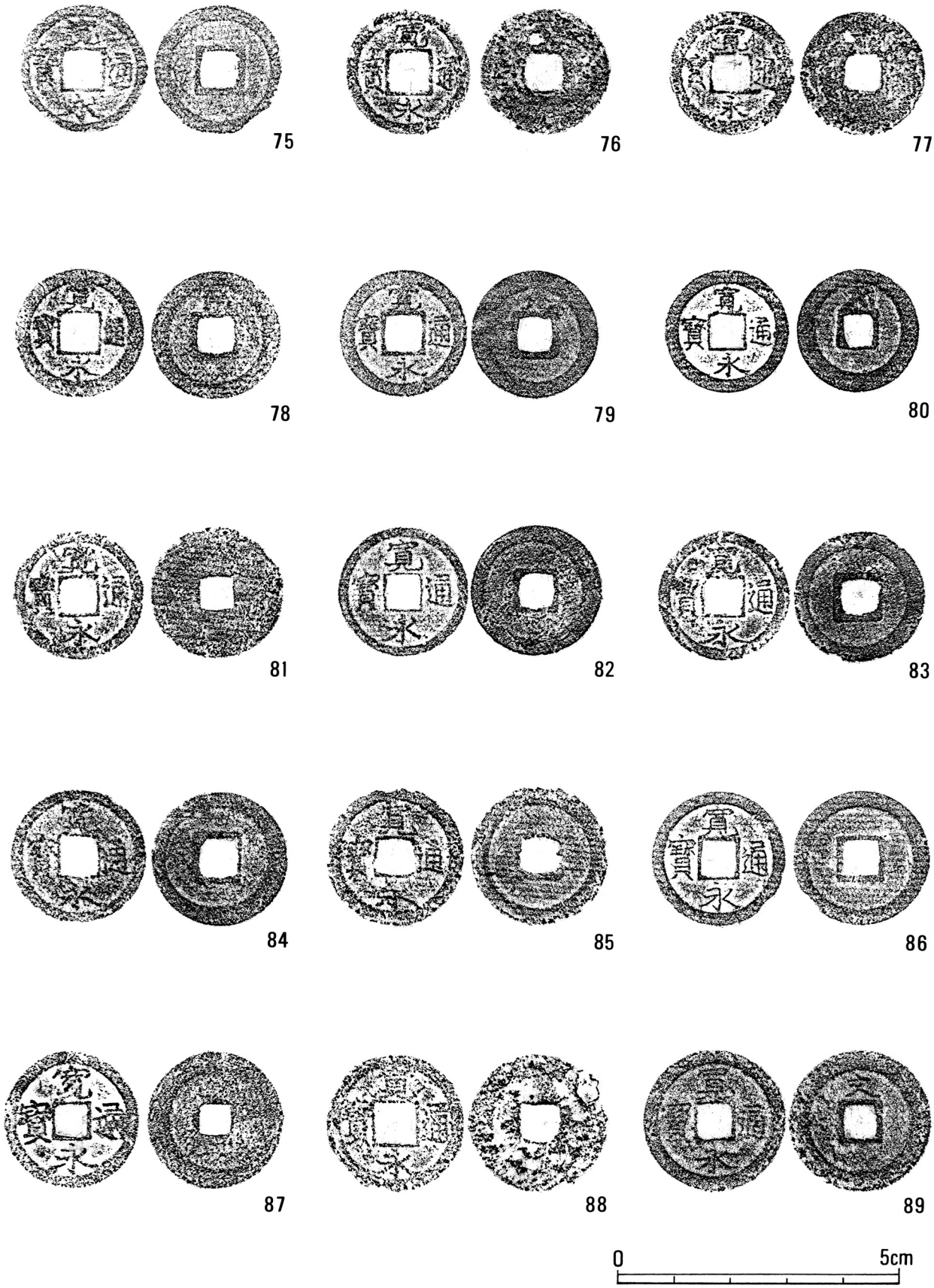
(2)和鏡の記載については、広瀬都巽『和鏡の研究』（角川書店　1974年）を参照した。




第13図　出土遺物(2)土器類・鉄製品類ほか（1：4）

第14図　出土遺物(3)和鏡（1：1）

SX 37 (75～89)




第15図　出土遺物(4)銭貨（1：1）

## Ⅴ　岡村中近世墓群の歴史的意義

ここではまとめとして、岡村中近世墓群の持つ意義について触れておく。

### 1　火葬坑群の状況と性格

今回の発掘調査における最大の成果は、中世後期を中心とする火葬坑群が検出されたことである。火葬坑は丘陵尾根沿いに群集し、合計99基を確認した。これらは、大きく見ると丘陵尾根筋に沿って展開する一群（A群；19基）と、その東斜面に形成された幅３m程度のテラス状部に展開する一群（B群；80基）に分けることができる。A群には、鏡が副葬されるＳＸ50や、突起を持つ棺を用いたＳＸ57のようなものがあり、B群に比べてやや優位な状況が観察できる。

これらの火葬坑群は、土坑内から火葬人骨が出土していることから見ても、荼毘の場であると見てよい。遺構の状況から見て、土坑は棺の大きさとほぼ同じで、石を敷いたり、あるいは石で押さえたりしたものがあったことがわかる。

遺構規模は第16図に示したような分布を示している。その規模は、長さ70～120㎝、幅50～80㎝程度のものが中心と考えることができる。この土坑内に棺が収められているのであれば、必然的に土坑規模よりも一回り小さい棺であることになる。そうすると、棺の大きさは長さ60～110㎝、幅40～70㎝ほどと考えることができる。

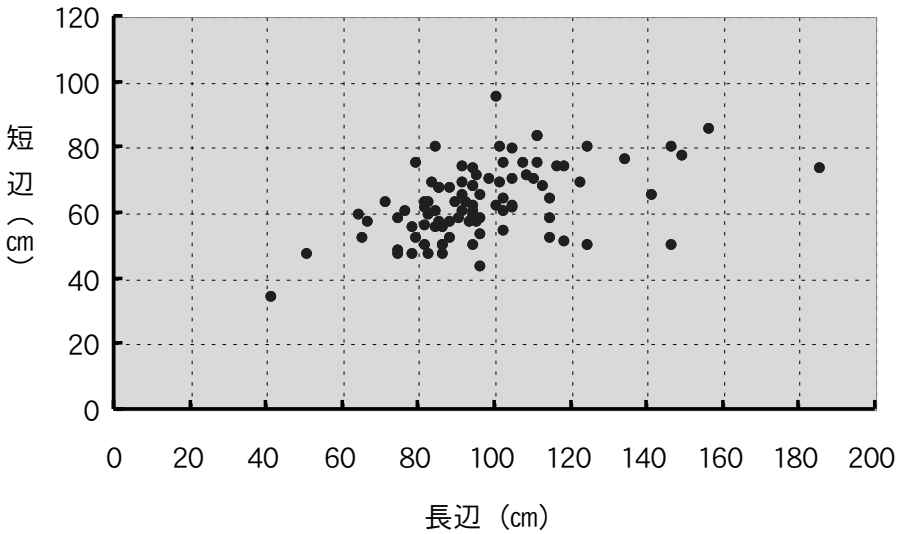
棺の規模をこの程度と考えた場合、遺骸がこの中に伸展葬で納められたとは考えにくい。おそらく、やや足を曲げた状態で棺内に安置されていたものと考えられる。中世墓ではこのような埋葬スタイルが数多く確認できる(1)ことから、岡村中近世墓群についても同様な傾向を示していると見てよいであろう。

### 2　出土遺物の状況と性格

出土遺物で最も多く確認できたのが土師器類で、なかでも皿類が中心である。概ね中世後期、より限定すれば15世紀前葉から後葉にかけてのものが多く認められた。土師器以外のものは数少なかったが、白磁椀、小刀類、鏡なども見られた。これらの遺物は火葬坑内から出土したものが多く、基本的には副葬品と見てよいであろう。

ただし、副葬される土師器には時期的な傾向が存在しているようである。火葬坑内から出土する土師器皿類は、概ね南伊勢中世Ⅲｂ期(2)を中心としたもので、年代としては15世紀中葉頃と考えられるものである。しかし、遺構に伴わない状態の土器には、南伊勢中世Ⅳａ期でも新相（15世紀末～16世紀初頭頃）のものが数点見られる。遺構に伴わない遺物も含めれば、当地での火葬（荼毘）は、16世紀初頭頃までは継続して行われていたものと考えられる。つまり、荼毘の際に副葬品として土器を納める行為は、16世紀初頭頃を境に、次第に衰退していったと考えられる。

墓に土器を副葬する行為は、近世でも継続して確認できる(3)ので、墓そのものに副葬されなくなったわけではない。岡村中近世墓群で認識できるのは、火葬坑に対する副葬行為の変化なのである。



第16図　岡村中近世墓群火葬坑の規模一覧

### 3　火葬坑ＳＸ50出土の和鏡

ＳＸ50出土の和鏡は、蓬莱鏡としての図柄は通常よく見られるものであり、意匠として定まっていたのではないかと考えられる。同種の和鏡は鹿児島県新田神社に５面見られ、極めて近似した画郭構成である[4]。近隣では、伊賀市菅原神社所蔵の和鏡にほぼ同意匠のものがある[5]。新田神社所蔵の和鏡は、鎌倉時代後半頃のものと考えられており、ＳＸ50出土和鏡についてもほぼ同じ時期と見てよいであろう。ただし、遺構としてのＳＸ50は15世紀前半頃と考えられるため、この鏡は伝世品と見るのが妥当である。

### 4　火葬坑群の性格

岡村中近世墓群は、基本的には「荼毘の場」と認識できる。菟上遺跡（四日市市）でも当遺跡と同様の火葬坑群が検出されており[6]、火葬坑内の遺骨は一部収骨された状況が確認されている。つまり、蔵骨器に納められて埋葬される「墓地」が、荼毘の地とは別に設けられていると考えられる。岡村中近世墓群では人骨分析を行っていないが、基本的には菟上遺跡と同様な施設群と考えられよう。

荼毘に際しては、鏡・小刀などの副葬品を伴うものもある。ＳＸ50から出土した鏡は激しく熱変しており、副葬品を入れた状態で火葬されたことを示している。ここから、火葬地そのものも葬地として認識されていたと見ることができる。

つぎに、火葬坑の群集形態である。火葬坑の確認事例はいくつかある[7]が、その多くは単独もしくは数基程度の群集である。岡村中近世墓群や菟上遺跡のような群集形態が確認された事例は数少ない。また、一般に火葬坑から出土する遺物は極めて少なく、所属時期が特定できないものが多いが、そのなかにあって岡村中近世墓群のように、ある程度の時期が特定できる事例は稀である。

単独の火葬坑が存在することを踏まえると、岡村中近世墓群の事例は、集団による火葬地であるといえる。つまり、火葬という葬送方法が集団として受容されたことを示している。

さて、「荼毘の場」と「蔵骨の場」という２箇所の葬地が出現することは、近現代の民俗事例に見られる「両墓制」との関連をも考える必要がある。両墓制は「埋め墓」と「参り墓」の２箇所であり、岡村中近世墓群をそれを完全に同一視することはできないが、いずれも集団としての葬地が存在することには注意が必要である。

岡村中近世墓群は、葬送方法としての火葬を集団として受容した状況を明確に示す事例として特筆できる。その形成主体は、鏡・白磁・小刀などを有する被葬者についてはやや階層的に上位の物を想定できるが、圧倒的大部分は何も副葬されない被葬者である、そして、それらがとくに大きな差をなさずに混在している状況が注目できる。

これらのことから、岡村中近世墓群を形成した集団とは、一定の紐帯を有した「惣村」的な集団であったものと考えることができよう。そしてその集団とは、遺跡の所在する位置から見ても、現在の岡村集落の前身と考えるのが最も適切であろう。

### 5　過去と現在の間に横たわる空白

現在、岡村集落の墓地が、岡村中近世墓群のすぐ東側に形成されている。しかしそこには、五輪塔をはじめとした石塔群は見られない。岡村集落の中にある滋照寺（現在は無住）の裏手にある墓地では、わずかな五輪塔が見られるものの、その数はあまりにも少ない。大規模火葬坑群が作られた直後の16・17世紀の状況が空白なのである。岡村中近世墓群を正しく評価するために必要な検討課題としてここに提示しておく。　　（伊藤裕偉）

＜註＞

(1)中世墓の埋葬形態については、中世墓資料集成研究会編『中世墓資料集成－中部・東海編－』(2005年)を参照した。

(2)中世の時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』静岡大学　2005年）に拠る。

(3)近世墓に土師器が伴う状況は、志摩市・浄土近世墓地の発掘調査により、墓壙内から土師器皿類や尾張系焙烙が多数出土している事例が確認されている。平成16年度三重県埋蔵文化財センター調査。

(4)椙山林継ほか「薩摩の神社奉納鏡～大形和鏡を中心として～」（『國學院大学考古学資料館紀要』第14輯　1998年）

(5)舘邦典「菅原神社所蔵の和鏡」（『伊賀市文化財年報１』2005年）

(6)三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』(2005年)

(7)例えば、松阪市・天花寺中世墓群（三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』Ⅳ　2000年）、鈴鹿市・居敷遺跡（三重県埋蔵文化財センター『居敷遺跡発掘調査報告』　1996年）など。

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | たまききゅうりょうのちゅうせいかそうこうぐん |
| 書　　名 | 玉城丘陵の中世火葬坑群 |
| 副 書 名 | |
| 巻　　次 | |
| シ リ ー ズ 名 | 研究紀要 |
| シリーズ番号 | 15－4 |
| 編 著 者 名 | 伊藤裕偉 |
| 編 集 機 関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所　在　地 | 〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596(52)7031 |
| 発 行 年 月 日 | 2006年3月28日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| おかむら<br>岡村<br>ちゅうきんせい<br>中近世<br>ぼぐん<br>墓群 | わたらいぐんたまきちょう<br>度会郡玉城町<br>おかむら　じょんば<br>岡村字城廻場 | 24461 | 461 | 34°<br>29′<br>50″ | 136°<br>37′<br>25″ | 19901001～<br>19910113 | 500 | 県道田丸停車場斉明線道路改良工事 |
| じょんばいせき<br>城廻場遺跡 | | | 363 | | | | | |
| じょんば<br>城廻場<br>こふんぐん<br>古墳群 | | | 220 | | | | | |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 岡村中近世墓群 | 墓跡 | 室町戦国<br>江戸 | 火葬坑群 | 和鏡・土師器・白磁・鎌・小刀 | 火葬坑群密集形態 |
| 城廻場遺跡 | 集落跡 | 弥生後期 | 溝 | 弥生土器 | 方形周溝墓か？ |
| 城廻場<br>古墳群 | 古墳 | 古墳<br>後期？ | 古墳 | なし | |


要約

岡村中近世墓群では、合計99基の火葬坑群が検出された。時期的には室町・戦国期の15世紀後半から16世紀初頭頃が中心である。副葬品には和鏡や白磁・鉄鎌・小刀などが見られるが、全体的に少ない。この遺跡からは石塔がほとんど確認されていない。このことから、ここで検出された火葬坑群は「荼毘の場」と考えられ、その一部が収骨されて別の場所に葬られているものと考えられる。群集形態からは、「惣村」ないしは「惣郷」による集団火葬場と考えられ、当時の葬送を研究するうえで重要な資料になると考えられる。

同じ調査地にある城廻場遺跡・城廻場古墳群についても、その一角が調査された。城廻場遺跡では弥生時代後期の方形周溝墓と考えられる溝、城廻場1号墳では、周溝の一部が検出された。

全景（南から）

全景（北から）

ＳＸ49～51（北から）

ＳＸ30～40付近（北から）

ＳＸ77・80～84付近（東から）

ＳＸ13～19付近（南から）

ＳＸ50　出土和鏡

出土土器類

玉城丘陵の中世火葬坑群
研究紀要　第15-4号

2006（平成18）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　株式会社アイブレーン